

これからのへき地・複式・小規模校教育 (上)

北海道教育大学 へき地・小規模校教育研究センター
センター長・副学長 玉井 康之



独立行政法人教職員支援機構

目次

I. へき地校のマイナス面と言われることについて

II. へき地校の特性として活かしやすい雰囲気大切に
以上 (上)

III. 学級ルールを踏まえた少人数・複式の学級経営
以上 (下)

※本講義では、へき地教育の基本的な特徴とへき地教育を捉える
観点、及び学級経営の在り方を中心にして講義したいと思います。

※校種別・学校別にも状況は異なるので、一般的な特性と方向性
を確認していきたいと思います。

I. へき地校のマイナス面と言われることについて

- 教師が初めてへき地校に赴任すると、マイナス面や新たに担うべき教育活動だけが意識され、少人数のプラス面を意識できなくなる。
- へき地校の社会性等のマイナス面は指摘されるが、へき地校のプラス面をどのように意識させられるか。
- へき地校の社会性や自立性の育成は、TPOを区別して行動させれば、可能ではないか。
- へき地教育のマイナス面と言われる小規模性・地域性を逆に生かして、プラスの側面に定義づけることができるか。

例えば、「へき地教育とは、辺地にある小規模校の中で、子どもと教師の強い信頼関係および学校と地域の協働性を基盤にして、異学年活動・自然体験活動・地域探究活動等を通じて、個に応じた教育活動・自立的な学習活動・リーダーシップ教育等を推進し、もって社会に開かれた教育課程と生きる力を育成しやすい特徴を有する教育である」

I. へき地校のマイナス面と言われることについて

1. へき地教育のコミュニケーション力・社会性のマイナス面の指摘

○大規模校との比較の中で、へき地校のプラス面や可能性は意識させられるか。

- ①一般的に指摘されるへき地・小規模校のマイナス面は、競争心が少なく、なれ合い的になり、コミュニケーション力や社会性が低いのではないかという指摘。
- ②一方大規模な学級では、全員に対してコミュニケーション力や社会性を高める取り組みを施せられているか。=一部で高い人がいても、他方で大人数の中ではコミュニケーションや人間関係をとれずに、表現力をうまく発揮できない側面があることも認識する必要あり。
- ③教師は一般的に、コミュニケーション力が高い人を中心にして、学級集団をまとめようとする。無意識のうちに“できる子”に依拠してしまう。
→しかし出番が多く全員をリーダーにしやすいのは、へき地・小規模校。

I. へき地校のマイナス面と言われることについて

2. へき地の社会性のマイナス面と大規模校のマイナス面

○学級規模が大きければ必ず社会性ができると言えるだろうか。

学級・学校規模が大きければ社会性が養われるわけでもなく、大人数集団では人間関係が疎遠になることも。真に心を開くことができなければ、形式的集団性・形式的同調性・深層不信感・友達の固定化を誘発する場合も。（しばしば“社会性”と言われるものの中に、信頼関係を抜きにして、社会儀礼のマニュアル的・形式的な礼儀だけを指すものが少なくない。）



へき地校に合った、出番やコミュニケーションを増やした指導を意識的に追求すること。（少人数がマイナスになっているとしたら、自然発生的に成長する環境に任せて放置したままで、大人数学級での価値観・評価をそのまま持ち込んでいる場合が多い。）



子ども同士の信頼関係を維持しながら、馴れ合い・地域の閉鎖性を高めない取り組み＝子どもの社会性・集団性・言語コミュニケーションを高める機会を増やすように、学級経営や学習指導面のあらゆる場面で意識すること。

I. へき地校のマイナス面と言われることについて

3. 現代の子どもの希薄でバーチャルな人間関係の特徴

○一般的な子ども同士の間関係の希薄化傾向の中で、へき地校の可能性を見出すことができるか。

- ① ネット社会の中で表面的で希薄な人間関係＝遠くの同質者との交流を求める傾向
⇒ 身近な異質者との協調意識が希薄化し信頼関係を作れない。
- ② 異年齢・異世代交流の減少、地域社会活動及び高齢者との交流が減少
⇒ 同級生と交流できても、異世代との人間関係が苦手。
- ③ 自然との触れ合いや自然体験・生活体験・集団遊び等の原体験の減少
⇒ 体験的・実感的な認識が低下し問題解決方法もバーチャル化。

現代の子どもの一般的な特徴をまとめると ↓

＝信頼を基盤にした人間関係力・コミュニケーション力・集団的チーム力・具体的解決力が低下

- 人間関係は、形式的な関係性だけでなく、信頼関係を基盤にすることが不可欠。
へき地校の強い関係性を元にした人間関係づくりをメリットとして自覚できることが重要。
- へき地・小規模校にこれらの問題を解決する積極的な基盤があるのではないか。

I. へき地校のマイナス面と言われることについて

4. へき地・小規模校の学校環境を社会性の育成に活かす発想の転換

○へき地の環境で、子どもの社会性を伸ばすためには、何をすればいいか。

①へき地・小規模校では、社会性の育成の場は、学級内だけではなく異学年・全校活動・地域社会等の活動の場でも育成できるという発想の転換

②社会性の育成のけじめは、TPOに応じて、「授業と遊び時間」、「先輩と後輩」、「教師と子ども」、「競争する場と協働する場」など、意識的にフォーマルな場と日常生活との区別をつければ、小規模校においてもけじめをつけて指導できるという発想の転換

③全員発言・全員発表・地域公開学習発表会など、少人数だからこそ実施しやすい表現活動・社会的マナー・尊敬謙讓の敬語法等の社会性の育成条件がたくさんあるという発想

⇒少人数の中でも、日常的にコミュニケーションをとる機会と場は、設定できる。

⇒少人数の集団に適合した学級運営・学習指導・学校経営のルールと運営方法を設定することも重要ではないか。

Ⅱ．へき地校の特性として活かしやすい雰囲気大切に

○比較してへき地の子どもの良いところを発見して子どもたちに伝えられているか。

1. へき地の子どもの特性と良さ

○へき地の子どもが進学して、大人数の中で一旦萎縮するが、長期的に伸びる子どもの中にへき地小規模校出身の子どもが少なくない。

○周りを気遣うへき地の子どもの習慣で、市街地校に進学すると、一旦遠慮するが、社会性・行動力・表現力が劣っていることはない。

○複式指導・間接指導では、自学自習の習慣を含めて、自分で行動する子どもが多い。

→自分たちでは意識していない特徴と良さを自覚させる声掛けを
すること

→へき地の子どもと学校の良さを子どもたちに伝えること、へき地教育の可能性を確信し続けることが、へき地の子どもたちを伸ばす。

Ⅱ. へき地校の特性として活かしやすい雰囲気大切に

2. ピグマリオン効果（期待効果）を高めやすいへき地・小規模校

○へき地校の子どもへの期待を寄せて、ピグマリオン効果を高める指導をしているか。

○へき地校では、教師と接触する機会が多く、教師への信頼感が高いので、ピグマリオン効果（ギリシャ神話）＝期待効果を発揮しやすい→＝子どもが期待に応えようとする力につながる

○「自分たちの良さがある」「自分たちはきっとできる」「伸びるように頑張りたい」「期待に応えたい」という内発的な動機が、人間の成長にとって一番重要であり、それを浸透させやすいのもへき地小規模校の良さ

○期待に応えて、内発的な動機から伸びる子どもの育成が、長期的には最も重要

Ⅱ．へき地校の特性として活かしやすい雰囲気大切に

3. 小規模性や地域性を活かした環境

○へき地・小規模校の特性を活かした教育活動を意識的に企画しているか。

小規模性・地域性を活かした指導を創れる柔軟な環境がある。

- 1) 教師と子どもの信頼関係を形成しやすい。
- 2) 異年齢・異世代の関係を作りやすい。
- 3) 個々の子どもの到達点にあった学習指導・生活指導をしやすい。
- 4) 子ども同士の協同活動・グループワークをしやすい。
- 5) 子どもの発言機会・発表機会を増やしやすい。
- 6) 地域の特性を生かしたカリキュラムを実施しやすい。
- 7) 自然体験学習・農業体験学習を行いやすい。
- 8) 全員が役割を持った運営を行いやすい。
- 9) 地域に協力する公共活動・ボランティア活動を行いやすい。
- 10) 教師同士も意思疎通を図りやすい。

→これらをプラス面として意識的に追究したカリキュラムと指導の特色と環境を創りやすい

Ⅱ．へき地校の特性として活かしやすい雰囲気や環境を大切にする

○へき地の子どもたちの生活環境も意識的に改善しようとする、活かせる環境があるが、それらを意識的に追究しているか。

現代の子どもたちの生活環境の特性とへき地の生活環境の可能性

一般的な現代の子どもたちの生活環境の特性	相対的に見たへき地の生活環境の可能性
子ども同士のふれあいの機会の減少	子ども同士のふれあいの存在
子どもたちの生活がバーチャル化	自然体験等の五感を使った遊びが可能
同年齢集団による仲間関係	地域の異年齢集団の残存
社会体験・ボランティア体験の喪失	日常的な地区の共同作業・奉仕活動が存在
家業手伝いの希少さ	家業手伝いの残存
高齢者との交流の欠如	生活を通じた高齢者との日常的なふれあい
親同士の間関係の孤立化	親同士の間関係の残存
少子化・核家族化	複数兄弟姉妹・多世代家族
過保護・過干渉	適度な保護と干渉
塾等の過度な受験競争	ゆとりある教育
言語のみによる教育	体験をともなった教育
系統学習・一斉授業の展開	統合型カリキュラムの残存
学校行事の削減	豊富な学校行事

(川前・玉井・二宮編著『豊かな心を育む へき地・小規模校教育－少子化時代の学校の可能性』学事出版社より)

Ⅱ. へき地校の特性として活かしやすい雰囲気大切に

4. へき地小規模校の学校運営を高めるチーム性が高いことを生かす

(1) 小規模校の学校運営のブレインストーミングをしやすい環境

○管理職や中堅教師が、自らへき地小規模校の運営のやりやすさの積極面を語る。

○「どうすればいいか」のブレインストーミング(創造的集団思考)を提案する。

→へき地校は市街地校と同じような分掌ごとの担当では運営できない。全員で全体を検討していく。小規模校では、トータルに学習指導・生徒指導・地域活動・教科等をとらえることが可能。

→また若手教師は子どもとの距離も近く、教職員の中で若手が自由に意見を言える雰囲気を作りやすい→特性を生かしてチーム学校を創る

(2) 地域と一緒に行事・生活指導・家庭教育等を相談・連携しやすい

→教職員が少ないから、行事も生活指導も地域住民と一緒に運営する。
=地域に溶け込み地域をコーディネートする力が求められる。

これからのへき地・複式・小規模校教育 (上)

北海道教育大学 へき地・小規模校教育研究センター
センター長・副学長 玉井 康之



独立行政法人教職員支援機構